

留学先決定までの経緯

Kazuya Kawakami

The University of Tokyo

www.kazuya.kawakami@gmail.com

6/2014

秋より、カーネギーメロン大学コンピュータ科学科へ留学予定の川上です。東京大学工学部 松尾研究室にて、人工知能、機械学習に関する研究を行っています。留学に先立って留学先決定までの経緯をまとめておきます。

1 留学したい

僕がはじめて留学してみたい、と思ったのは福岡の久留米市という少し(かなり)田舎にある国際色とは程遠い、女子が入学するようになったのもつい数年前、というような高校に通っていた頃だった。日本の大学受験って大変そうだなあ... なんかちょっとハーバードとか行けないもんかなあ... と軽い気持ちで TOEFL の本を買ったりしていた。結局、大学院の受験を決めるまでその本を開くことはなかったが、同期の中にアメリカに行きたいといって SAT の勉強をするような人がいたので彼らに触発されて一応、悩んではいた。その当時は、いまアメリカに行っても何もできそうにないから、日本の大学で頑張ってからにしようと考えて留学をやめてしまった。

要するに、勇気がなかっただけのことだが、いまでもどちらが良かったのかよくわからない。英語の上達や海外社会への順応という意味では、若いうちに留学する方が良いと思う。実際、ハーバード大学やロンドン大学に進学した友人たちはとても充実した生活をしていたようで彼らの活躍にはいつも刺激を受けていた。一方、日本の大学に来たことによって得たものも少なくはない。大学生というのはある種特別な時期で、普通では絶対にお目にかかることのない偉い方々にメールをすれば会えたりする。一旦社会に出ると、どこかの社長に会うなんていうこともほとんどないだろうが、大学生は人に会い放題である。4年間を通して知り合った方々から受けた影響の大きさを考えると日本の大

学に進学したのも間違っていなかったようにも思う。

2 戦いは突然に

そんなこんなで4年間留学をしたいなとぼんやり思っていたものの、米大学院の戦いは思いもよらない形ではじまった。忘れもしない7月19日、院試が8月にあるらしいので、そろそろ願書を書こうかな、と思った日のことである。出願書類をみると、提出期限は7月初旬…。東大への進学道が断たれていたことを、2週間も遅れて知って青ざめた。先生、親しい友人に「すみません、日本にはいられなくなりました。」と正直にメールを送った。さすがにここまで育ててくれた親にはそんなことも言えず、「日本の大学はダメだからアメリカに行くよ」というようなことを言っておまかした。出願について何も知らないまま、残された時間は5ヶ月弱。かなり厳しい状況に追い込まれてしまったが、いよいよ行くしかなくなってきたか、となぜかニヤニヤしていたのを覚えている。振り返ってみると後がない状況に追い込まれたからこそ、頑張れた気もするので、あまり咎めないでほしい。

3 出願の流れ

上述のような経緯で、出願に関して何も知らないまま急いで準備を進めることになった。ここでは準備に必要なプロセスをおおまかにまとめておく。

3.1 TOEFL / GRE

1つ目のハードルは英語の試験である。僕の場合は8月1回目のTOEFL、9月TOEFL100点超え、10月にGREを1回受験、ということで、おおむね作戦通りとなった。あまり時間がなかったため、塾やオンラインGRE対策サービス、Magooshなどを駆使し、20万円くらいは使った。GREのVerbalが思っていた以上に悪かったので少し焦ったが、日本人で留学する人はそれほど高いスコアを取っていないようなので気にしなくていいように思う。勉強をするときはTOEFLで100、GRE Verbal 150を目指して勉強し、出願の際にはTOEFL 95、GRE Verbal 140くらいでも慌てず、自信をもって出願してしまおう。あまりスコアにこだわりすぎて書類や出願がおろそかになるよりは、全体をきちっと通したほうがよいというのが僕の思うところである。

TOEFLやGREというのは英語力が本当に向上していなくても点数だけをあげることができる類の試験である。形式が決まっていて、毎回の試験の質が同じになるように調整されているので、試験形式にどのくらい慣れていけるかがものをいう。その昔、土日連続でTOEFLを受験できた頃は、土

曜日より日曜日のほうがよくなる傾向があったらしい。いまは2週間間隔での受験となるのでそうもいかないが、前日に TOEFL Practice Online というオンラインテストをやってから試験を受けると自然と点数が上がったりする。時間がない人はひたすらノウハウを叩き込んで受験すると良いと思う。本格派の人には怒られるとおもうが、背に腹はかえられない。ここは高い点を取った人が勝ちである。

3.2 推薦状 / 奨学金の準備

続いて、推薦状や奨学金など国内での準備のプロセスである。僕が一番苦労したのが研究計画を固める作業である。研究をはじめたばかりの段階で、博士での研究テーマを書くというのはそれほど簡単ではない。学問全体の流れと自分の研究テーマを上手く絡めながら作るのが良いという直感があったが、学部の4年生だけではそう簡単にいかない。僕の場合、指導教官に1時間ほど時間をとっていただきゆっくり話して固めた。先生が書いている研究計画書や博士の研究計画が手に入る場合には大いに参考になると思う。アドバイスを受ける前とあとでかなり変わったのでこれから出願する方がいれば一度は先生のアドバイスを受けることをおすすめする。出願当初は新卒採用に書くエントリーシートのような、もはや研究計画とはいえないしょぼい書類を書いていて、応募した奨学金はとにかく全部落ちた(笑)。結局、締め切りが一番遅く、納得のいく書類を準備できた本奨学金には採択いただいた。世の中甘くないというか、きちんとやりましょうということらしい。

4 出願

最後はいよいよ英語での書類の準備、出願となる。志望動機などを記す SOP の準備は、奨学金の申請に用いた研究計画を英語でまとめなおし、各大学の研究や先生を調べて丁寧に書いていく作業である。この作業もあまり甘く見ずにやったほうがよい。合否が決まるのは TOEFL のスコアというよりこちらの提出書類になると思われるので、時間はなくてもしっかり書くべきである。研究テーマを書くのはもちろんのこと、希望の指導教官の名前を書いたり、受講したい講義を書いたり、事前に連絡した先生とのメールの内容を書いたり、できるかぎりのアピールは尽くしたほうがいい。特に、学部生から留学の場合は、研究業績もほとんどないだろうし、事前にどこかの先生から内々定をもらうようなこともそうそうないだろう。合格率が示すどおりの厳しい選考に A4 の紙 2 枚と推薦状 3 枚で真っ向勝負するわけだからとにかく必死にやるしかない。その上で基本的な英語のミスがないよう、ネイティブチェックを何度か通したほうが良いと思う。日本人らしく下手な英語で突破しちゃうぞ! というのはたぶんよくない。

また、各大学に提出する出願フォームを作る時間もみておいたほうがいい。1 校ごとに出願用アカ

ントを作り、数ページの Web フォームを入力しなくてはいけないので、それぞれのパスワードをきちんと管理し、要求される情報を漏らさず把握するのに思った以上の労力がかかる。僕の場合はエクセルに「大学名、出願学部、TOEFL の要求点、GRE の要求点/必要科目、締切日、希望の指導教官、出願ページの URL、ユーザ名、パスワード、備考」の列を用意し、暇さえあればこれをみて出願状況を管理していた。誰でもやっていると思うが、このフォーマットでうまくいくと思うので、ひとまず試してみてください。

意外なことに、出願してからやることはたくさんある。大学のアドミッションオフィスからメールや電話がきて、出願内容について問い合わせがくることもある。また、教授からメールがきてインタビューをすることになる場合もある。インタビューは僕にとってはとても面白いものだった。僕が研究している Deep Learning と呼ばれる機械学習アルゴリズムがあるが、面接ではアルゴリズムの発明者やいつも論文を読んでいる教授陣とのディスカッションをすることができた。全てから合格をもらえたわけではないが、最先端の研究や問題意識を議論できる機会はとても貴重なものになった。はじめは 15 分くらいの予定だったインタビューが 1 時間位になったこともあり、ワクワクした。今後の研究生活にとっても大きな影響を与えることになると思う。これからインタビューを迎える方は、英語ができないからテンプレートを作る、といったようなことはせず、自然体で臨むと良いと思う。質問内容はすこし専門的なものになるが、知識を試しているというよりは、楽しくディスカッションできるかどうか試されているような感じがした。

5 思い出の 1 言

出願にはいろいろな思い出があるが、一番心に残っているのが、進学はしなかったものの面接で多くのアドバイスをもらった UCLA の教授との会話である。当時の僕は留学のことを寝ている間も考えていて、とにかく大学院に入りたい、1 つでも合格したいという気持ちばかりが先行して、研究をどうしたい、というようなことを考える余裕がなくなってきた。UCLA はとても先端的な研究を行っているが、僕の研究している分野の教授は少ない。一方、知名度は高く (すくなくとも日本ではカーネギーメロン大学よりは知名度はある)、進学してもいいかな。と思っていた。そんなとき、「君にとってにここが一番かな。」と一言もらった。んー。確かに冷静に考えてみるとどうやら一番ではなさそうだった。受験にばかり気をとられて、受け身になってしまったところを正されたような感じだった。読んでいる方に響くかどうかはわからないが、すくなくとも僕には響く言葉だった。研究にしても、留学にしても、自分のためにしているんだ。ということはこれからも長く忘れないよう、心に留めておこうと思う。

6 謝辞

最後に、留学の実現に当たって多くの支援をいただいた方々へお礼を述べたい。本奨学金をとおして多大なご支援をいただいている船井情報科学振興財団方々、推薦状の準備にご協力いただいた先生方、アドバイスをくださった多くの先輩方、それから不安定な出願時期を支えてくれた家族、友人にはとても感謝している。今後、面白い研究をして、いつかは恩返しができるよう、がんばろうと思う。